

ハンガリー動乱50年:動乱を招いた暗黒時代(その1)

盛田 常夫

ショーヨム大統領は健康保険の部分的民営化法案を議会に差し戻した。社会的コンセンサスに欠けるというのが本音だが、憲法裁判所の判断を仰ぐことなく、国会への再審議に委ねた。憲法判断になるかもしれないという政府与党の危惧は回避されたが、健保民営化は国民投票に値する問題だという意見は野党や知識人の間に根強い。授業料や診察料など比べてはるかに重要なテーマだ。

健保民営化はSZDSZが強引に推し進めたものだが、とくにSZDSZ系の経済学者が精力的に動いた。元大蔵大臣のボクロシュ・ラヨシュ（現、中欧大学学長）は理論的なキャンペーンを張り、バウエル・タマーシュがイデオロギー的な先導（扇動）役を担い、ミハーイ・ピーテルは法案作成のコンサルティング業務を担当した。

この3名の中で、バウエルのメディアへの露出が際立っていた。12月初めに法案に反対する知識人が反対声明を出したのにたいして、バウエルは「健康保険改革法案へ反対する人々へ」と題する批判声明の署名で対抗し、12月14日発行の *Élet és Irodalom* 誌にストを組織しているガシュコー・イシュトヴァーンを弾劾する長文の批判文（全面2頁）を出して、スト参加者を牽制した。バウエルは「法案反対者の行動は社会の進歩に反するもの」と大仰な批判を展開したが、安易な民営化を批判するのは知識人の当然の行為だ。

腰が引ける知識人

何人かの友人たちに、署名要請メールの諾否について尋ねた。多くは双方（法案反対者と法案賛成者）からメールを受けたが、どちらにも署名しなかったと答えた。政治にかかわりたくないからだという。国会に任せれば良いと答えた者もいる。法案を判断する指針がないからかもしれないが、その腰が引けた態度にハンガリー人特有のアパシーを感じた。

法案批判陣営のフェルゲ・ジュジャから声明文を送ってもらった。彼女たちはボクロシュやバウエルを「ネオリベ（ネオリベラル）の坊や」と呼んで蔑視している。他方、社交性のない彼のバウエルがどうしてこれほど意気込んでいるのか、バウエルの誤った議論が他の経済学者から批判されることなくどうして放置されているのだろうか。友人の経済学者は、「確かに問題はあるが、政治家になった経済学者と議論しても意味がない」という。

それにしても、バウエルの行動や論理を誰も批判しないのは不思議だ。バウエルの背後に何か存在するのだろうか。昨年8月にはホルン首相への叙勲を大統領が拒否した問題について、バウエルは例のごとく長文の文章を発表して、ホルンの功績を讃えて、大統領批判を行った。何故バウエルがホルン叙勲を擁護しなければならないのか。このことも気になっていた。

「爪はがしのバウエル」

バウエルの父が保安警察（ハンガリーの秘密警察）の大佐だったことは聞いていた。56年動乱で殺害されたとも聞いた。不幸な育ちだから、子供じみた社交性のない行動様式をとるのだと納得していた。ところが、そのことを友人に話したら、「とんでもない、動乱で死んだなんて嘘だ。まだぴんぴんしている。それも彼はただの秘密警察官だったのではない。<爪はがしのバウエル>と恐れられた取調官で、ほんの少し前に国会でその問題が取り上げられたばかりだ」という。

迂闊にも1999～2002年にかけて、「爪はがしのバウエル」こと、バウエル・ミクローシュの名前が、国会やメディアで飛び交っていたのを見逃していた。

インターネットで調べたら、2000年初頭に歴史公正委員会が、SZDSZの議員で弁護士事務所

を開いているエリョシ・マーチャーシュにたいして議員辞職を勧告している。その理由は、バウエル・ミクローシュなどの悪名高い旧保安警察官と共同で事務所を構えていたからである。これにたいして、エリョシは「バウエルの過去を知らなかった。近いうちに、バウエルは弁護士事務所を離れる」として、委員会の辞職勧告に答えた。しかし、過去を知らなかったというエリョシの説明を信じる人はいない。実際、バウエル・ミクローシュは、このエリョシの言明を「裏切り」と表現して、不快感を表した。

これに関連して、国会では「バウエルが弁護士資格をとった経緯を明らかにするように」という議員からの質問があり、当時の法務大臣が調査を約束している。

さらに、2000年の9月に、当時の小地主党議員がダーヴィッド法務大臣にたいして、バウエル・ミクローシュの経歴を紹介し、「当時の法務大臣リース・イシュトヴァーンが1950年9月15日に保安警察の取り調べにおいて死亡して件」について調査を求めた。これにたいして、法務政務次官は、「調査は継続中である」と回答している。

当時、この討議の中で、SZDSZ議員だったバウエル・タマーシュが登壇し、「父は戦前からの反戦運動家で、戦後はその言語能力を見込まれて保安警察官になったが、取調官であったことはなく、7年間の在勤中に取り調べにあたったのはたったの2回で、確かにそのうちの1回はリース・イシュトヴァーンの取り調べだったが、非難されるような暴力行為は行っていない。．．．体制転換で息子や同僚が政治家になり、今それらの人々が右派の政治家から攻撃を受けているのは不幸なことだ」と反論した。

要するに、父は何の罪も犯していないし、責任を取る必要もない。これは政治的な攻撃だというのだ。

過去の権力犯罪とどう向き合うか

戦後のハンガリー共産党の再組織化からラーコシ独裁に至る過程は、共産党が暴力的に権力

を奪取した時期にあたる。共産党が国家機構とは独立した武装組織をつくり、独裁権力の維持を脅かす人物を次々と拘束し、拷問を加え処刑し、スターリン型の恐怖独裁を構築した苦しい時代だ。1946年から1953年まで続くこの時期に、想像もできないような奸計が図られ、多くの命が失われた。日本ではこの時代の正確な情報が伝えられず、歴史学界では中・東欧の社会主義樹立を「人民民主主義革命」と規定する説が大勢を占めたが、現在から見れば、この規定は明確な誤りである。

1956年動乱はまさにこれらの失われた命の鎮魂と名誉の回復を求めたデモ行動が拡大して起きた歴史的事件である。ラーコシ独裁時代に両親たちが犯した歴史的犯罪にたいして、娘や息子、さらには後世の世代はいかに向き合うべきか。ハンガリーではこのような問いかけを発する人はほとんどいない。それにはいくつか理由がある。

一つは、ハンガリーでは民族の歴史的悲劇を祝日として鎮魂するが、自民族の戦争犯罪や権力犯罪にたいする責任を後世の世代が受け継ぐという倫理観念が希薄である。

二つは、カーダール政権が動乱参加者の大量逮捕・処刑に全力を注いだために、ラーコシ独裁政権を支えた集団や個人の犯罪的行動への対処・告発が事実上、見逃されてしまった。

三つは、ハンガリーの体制転換が「平和的」に行われた結果、過去の権力犯罪の検証と告発が中途半端になってしまった。

四つは、与党にも野党にも、トップの指導者の家族やその周辺に保安・秘密警察に関係した者がいるために、追求の矛先が鈍ってしまう。

この結果、バウエル父子のように、父が自らの犯罪も責任も認めず、子もそれに同調する者が多く、それがハンガリーの権力犯罪にたいする倫理意識を限りなく低めている。

もともと日本にも同類の問題が存在する。バウエル・ミクローシュが果たした役割は、戦前日本の特別高等警察（特高）と類似したものだ。特高による反戦主義者・民主主義者・共産主義

者の拷問・虐殺も、戦後そのほとんどが見逃されてしまった。作家小林多喜二が特高警察に捕まり、逮捕から半日もしないうちに命を落としたが、虐殺に直接手を下した連中や特高部長も、戦後の日本で大手を振って生きてきた。

バウエル・ミクローシュ問題が公になってから、SZDSZ内の内部対立が激しくなり、バウエルは2004年の総選挙に立候補できなかった。権力犯罪に深くかかわった父を擁護するバウエル・タマーシュに、連立政権の社会政策に反対する人々を批判する資格があるのだろうか。それとこれとは別だと割り切れるだろうか。

国家保安警察 (ÁVO、ÁVH)

ナチスドイツの進駐、それをバックに跳梁したハンガリーのファシスト集団「矢十字党」の暴力行為によって、終戦間際の短期間にハンガリーのユダヤ人の数多くがアウシュヴィッツへ送られた。この悲劇を生き延びたユダヤ系の若者にとって、ファシズムと戦い、戦後に再建された共産党へ加わることは、自然なことだった。

バウエル・ミクローシュは終戦と同時に、ハンガリー共産党へ入党した。一足早く、シェーンボルク・ユードイットとその弟センディ・ジョルジュも入党していた。ユードイットとミクローシュはほどなく結婚した。この彼ら3名は1945年1月に創設されたばかりの政治警察 (PRO, Politikai Rendészeti Osztály) に入り、やがてバウエルとセンディはやり手の取調官として名をはせることになった。

この政治警察は共産党が権力の武力装置 (警察・軍隊) を掌握するために組織されたもので、形式上はブダペスト警察本部の一部として創設されたが、実態は共産党の警察武力組織であった。ユダヤ系の青年が多数を占めるように組織され、「ユダヤ人の復讐心」が利用された。

翌1946年に、この政治警察は国家保安警察 (ÁVO, Államrendőrség Államvédelmi Osztály) に組織替えされ、共産党が握る内務省管轄下に置かれたが、実態は変わらなかった。そして、カードール・ヤーノシュが内務大臣になった1948年9

月に、内務省の国家保安局 (ÁVH, Államvédelmi Hatósága) として、自立した組織形態をとることになった。いわば共産党の私権力が国家権力として、公認されたのである。

1946年のPRO名簿によれば、バウエル・ミクローシュは第15課の課長を務め、その部下としてセンディ・ジョルジュとペトゥー・ラーロー (SZDSZの元委員長ペトゥー・イヴァーンの父親) が配置されている。PRO創設からの保安警察のメンバーはいわばエリートで、彼らは新しい世界を作るという希望と信念で共産党に加わったが、次第に権力・暴力装置としての役割を体現して、強権的に告発した「敵」を拷問し、処刑する道を進むことになった。

PRO、ÁVO、ÁVHの組織を創設から一貫して現場で指揮してきたのが、悪名高いピーテル・ガーボルである。事実上、ピーテルの行動を監督する上司はおらず、すべての指令は直接、ラーコシからピーテルに伝えられた。ラーコシはスターリンを習い、共産党権力の武力装置を掌握することで、自らの独裁的地位を維持するようになったのである。

当時、共産党はラーコシのほか、ゲルー・エルヌーとファルカシュ・ミハイが最高幹部に名を連ねており、これら3名はトロイカとよばれていたが、その力関係は対等なものではなかった。ゲルーは経済問題、ファルカシュはラーコシの腹心として内務問題を担当していたが、スターリンの信頼厚いラーコシはこの2人の上に君臨していた。

ファルカシュの息子ヴラジミールは短期間のモスクワ滞在からブダペストに戻り、父の片腕として、政治警察の現場に入り、各種の奸計の立案と拷問の現場に居合わせるようになった。バウエルやセンディなどの精鋭は、ピーテルやファルカシュの有能な部下として、各種のフレームアップに重要な役割を果たしていった。

容疑者の拘束、拷問が行われたÁVO、ÁVHの本部は、アンドラーシ通り60番地にあった。今、それが「恐怖の館」博物館になっている。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)